

# モノとコトから見た日英語比較

坪 本 篤 朗

## 0. はじめに

以下の議論では、知覚に関わる現象としてト書きに典型的に見られる連鎖を取り上げ、日英語の知覚や状況に関わる現象では日英語に共通する性質が見られることを見る。その後、日本語の例を中心にして、その意味的・語用論的性質を動機づけるのは、原初的な経験を表出した<未定形>の自発的 (spontaneous) な連鎖であり、そこには、日本語の《状況参加型》の特徴が反映していることを見る。

## 1. 状況と知覚の連鎖

### 1.1. 「ト書き連鎖」

まず、ここでは、(1)のような下線部連鎖を取り上げる。下線部の連鎖は、ト書きに典型的に見られることからト書き連鎖と呼ぶことにするが、この連鎖は、以下に見るように、ト書きだけに限定されるものではない。ト書き連鎖は、シナリオの他、場面や状況（心中で描かれるイメージの場合も含む）の描写・説明として用いられる映画的、映像的表現である。第1節では、ト書き連鎖の基本的な性質を述べる（詳細な議論は、(坪本 (1991, 1992, 1995, 2001)) を参照されたい)。当面の議論の眼目は、(1)のようなト書き連鎖（以下、XP-NP 連鎖と表記する）が、(2)の下線部と違って、モノ中心の形式をしていながら、コト（状況・事態）の解釈を持ち得ることを論じることにある。

(1) レンコ、バス停に止まっていたバスに飛び乗る。閉まるドア。(お引越)

(2) (なんどやっても小さすぎて、ドアが閉まらないことに業をにやして)

(大きな) 閉まるドアぐらい買っておけよ。(「閉まらないドア」との対比)

(cf. ドア、閉まる。/ドアが閉まる。/(?大きな) 閉まるドア。)

(1)の下線部のような連鎖は、形式的にはモノ形式(すなわち、NPを主要部とした名詞句構文)をしながら、意味的にはコト、すなわち、事態や状況を表す性質があり、その点で(2)のような下線部連鎖とは異なることを示す現象から見てみたいと思う。端的な例として、例えば、(1)と(2)の違いは、「大きな」のような修飾要素をつけた場合、(2)に比べて、(1)には付きにくいというところに見て取れる。この違いを考えるための方策として、ひとつは、(1)と(2)の修飾部の機能の違いに着目することが考えられる(cf.第4節)。また、ナイーブな直感として、(2)が静態的(static)であるのに対して、(1)にはなにがしかの「動き」や、場合によればなんらかの表出的な(expressive)な感じを抱かせるところがあり、こうした「直観」がどこから来るのかを考えることである。

英語では、(3)のようなト書き連鎖があり、ト書きや(4)のような写真のキャプションなどに用いられる。以下で述べるように、(3)の連鎖は、すぐ後で見るように、モノとしての側面とコト(事態、状況)を表す面がある。このパターンは知覚構文や存在構文に見られるものであり、ト書きが映像的性質を持っていることを考えれば、以下で述べるように、モノとコトの二面性を持つ(1)、(3)のようなパターンを用いるという点で、日英語に共通性があることはきわめて自然なことであると考えられる。

(3) Dereck(.) running around the track. [NP-XP連鎖]

(4) A World Trade Centre worker falling from one of the towers after the terrorist attacks yesterday. (caption: *The Times*, 2001)

しかし、以下に見るように、日本語のト書き連鎖に比べて、英語での適用範囲は、かなり限定されている。このような違いはどこから来るのかも考えなくてはならない。このような違いは、主体の優位性に関する日英語の違いと日本語には英語よりもより強く《状況参加型》の傾向があるからであると考えられる(cf.第5節)。

## 1.2. ト書き連鎖の基本的性質

それでは、以下、日本語ト書き連鎖を中心にして、状況、事態としての側面を持つ

ことをその基本的な性質をいくつかあげながら、見ていくことにする。ト書き連鎖の基本的な特徴としては、まず、(i) NPは、基本的に、XPに対して主語の意味関係にある。(ii) XPはNPの一時的な状態を表す。(iii) 知覚と密接に関連する、という3点があげられる。(5)-(7)の例によってこれらの特徴が見て取れるはずである。

- (5) [工事現場で休憩している労働者の様子が絵に描かれている。]

おひるやすみになりました。

「ぼりぼり、むしゃむしゃ、むしゃ。」—おかずのたくあんをかじっているおじさん「ぐうぐう、すうすう。」—つかれて、ねているおじさん—

(加古里子「だむのおじさんたち」)

- (6) いよいよ記念撮影だ。(中略) じっとして、紀子さまの目をごらんになる秋篠宮さま。ほほえましさを感じられる図柄だった。

(朝日新聞「天声人語」1990.)

cf. The prince looks directly into the princess's eyes. (*Vox Populi, Vox Dei*)

- (7) 画面は一転、見渡す限り死屍累々たる地獄絵となる。折り重なる死体、倒れたままものがく馬、虚しく空を蹴る馬の脚、傷つきさまよう兵、槍を持ったまま倒れる兵延々五分にわたり、この凄惨な死のフォルムを重ねる。最強と謳われた武田軍団の空しい死の風景、あの侍大将たちも殉じて果てたのである。

(都築政昭『黒沢明「一作一生」全三十作品』)

いずれもが、場面描写説明として用いられている。(5)では絵本に用いられて、場面を描写、説明する用法をあげてある。ここでもいろいろな特定の限定を承けた「おじさん」には違いはないが、それと共に、場面、状況の説明描写の働きもしていると考えられる。つまり、単に個体(モノ)としてだけの存在ではなく、事態(コト)を表している。こうしたコトとしての意味は、(6)、(7)では、この連鎖が「図柄」やフォルム、風景というように捉えられている。ちなみに、(6)には、参考にあるような文形式の英訳がなされている。(7)のような場合、一般的な「死のフォルム」としてではなく、眼前の状況を描写、説明しているような効果を持つ。このような効果の存在は、XP部に「動き」が感ぜられるかどうかにかかっている。その意味で、少なくともト書き連鎖の基本的な用法としては、XPが一時的な事態を表すことは、きわめて自然である。「動き」の問題は、後でさらに取り上げる。

- (8)-(10)のような例は、ト書き連鎖がモノとコトの<二面性>を持つことを、英

語では(8)のように *what* と *who* が共に用いられること、(9)のように文との連結および動詞の数人称の一致現象から、日本語では(10)のように指示機能によって示したものである。

(8) What/Who did you see?

- a. John swimming.    b. John, swimming.    c. John, who was swimming.  
d. A boy swimming. (cf. A mini, driving down a country road. [*The Crying Game*])

(9) a. Ben asleep in bed and Elaine enters softly

- b. Ben entering a fraternity house on campus – goes to a breakfast table.

[*The Graduate*]

(10) 土手に腰を下ろし、恋を語るアベック。{それ/二人/彼ら} をうらやましそ  
うに眺めている源公。(「それ」は実例「ハイビスカス」)

さらに、XP-NP連鎖が単なる個体(モノ)を意味するのではないことを見るために、XP-NP連鎖が<出来事空間>として捉えられる場合を見てみよう。(12)、(13)のような例では、ト書き連鎖は、(12)では、「空間」として、(13)ではその意味拡張として時間として捉えられている。(11)のようなイディオムがあるが、出来事と空間の関係について端的に捉えている。すなわち、「出来事が起こる」とは、文字どおり「出来事は空間を占める。」ことであると、言っているわけです。この連鎖が単なるモノを表す名詞句でないことを示している。

(11) EVENTS TAKE PLACE. (出来事は生起する：出来事は空間/場を占める。

cf. スティーヴン・ヒース「物語の空間」(1999)、池上(2000))

(12) (おとよは) 木サジで薬を口元に運ぶ保本の手をパツと撥ねのける。むっとする保本。そこへ赤ひげが来て交替する。

(13) それから二年、ほおずき市の夜の賑わいの中で、背に赤ん坊を背負ったおなかを佐八は見つける。立ちすくむ佐八、その時、背後の風鈴がいっせいに鳴り出す。《メタファー的拡張：空間→時間》(都築、同上)

さらにト書き連鎖(XP-NP連鎖)は、中心用法として、主題、主語およびコピュラをとらない、という性質をあげることができる。(14)の例を参照されたい。

- (14) a. (\*これ/\*それは) バスに飛び乗るレンコ (\*だ)。  
 b. (\*これ/\*それは) むっとする保本 (\*だ)。

このようなト書き連鎖の意味用法は、ひとつはXPの修飾機能に、ひとつはこの連鎖の成り立ちにおけるXPとNPとの結びつき方に求められる(第4節および第5節参照)。

## 2. ト書き連鎖の用法 (I) : 知覚から判断

2節では、ト書き連鎖の用法が知覚を中心とした用法から認識、判断の用法へと拡張されていることを見てみよう。(15)はいわゆる、「発見の<ト>」に後続してト書き連鎖が用いられており、連鎖は事態の出現や発見を表している。これを単に、個体としての「ナズナ」と考えると、それが「と」に後続していると考えことは極めて不自然である。また、(16)のように、物語展開などの始発文として用いられる用法がある((15)に対して(16)の用法は文字どおり眼前の状況と関係付けて用いられているというよりも、よりイメージ的な用法と考えられるが、(15)-(16)の関係は、<始発>と<提示>の機能との関連性を考えると自然な用法の拡張である)。次の(17), (18)は、(14)の基本的性質から逸脱するもので、コンピュータが用いられており、それぞれ、「夫は昨日まで元気に働いていた {の/から} である」や「部長は、“事件は大きい程張り合いもあるが、眷族の泣きを見るのが辛くってねエ”といつも云っている {の/から} だった」のような状況説明を表す、いわゆる、「~のだ文」に対応した働きを持っている場合である。知覚と認識さらに判断の意味の間に一般的によく見られるように、(15)-(18)にあっても、認識、判断の用法は、知覚を中心とした用法からの拡張用法と考えることができる(こうした用法の拡張と平行して、コンピュータが用いられている点で(14)で取り上げたト書き連鎖の基本的な用法から<ずれ>があることになる。しかし、主題部をとらないという点では(14)の基本用法は維持されている。例えば、(17), (18)の場合に「それは」とか「あれは」など、主題部とした文は言えない)。

- (15) レンコと砂原、なおも人混みを行く。と、向こうから人の流れに逆行してくるナズナ。<発見と提示 (存在)> (「お引越し」(シナリオ))

- (16) JFK 暗殺を阻止できず、以来罪の意識にさいなまれ続ける シークレット・サービスのホリン (クリント・イーストウッド)。ある日、彼のもとに謎の男 ミッチ (ジョン・マルコビッチ) から、現職の大統領暗殺を予告する電話が。  
(ビデオ)
- (17) 「主、主人がですか？」 そういと、店の奥から出てきた野々村の細君は、血の気を失って倒れかかった。無理もなかった。昨日まで、元気に働いていた夫である。 <状況説明 (→判断・理由)> (西東登『蟻の木の下で』)
- (18) XP は一時的な事態でなくてもよい：会社の関係者でも通夜に来ているのであろう。朝と変わって賑やかな空気—何れにしる肉親が1人もいないだけに湿っぽくないのが部長には気に入った。— “事件は大きい程張り合いもあるが、眷族の泣きを見るのが辛くってねエ” といつも云っている部長だった。  
(島田一男「殺人演出」)

### 3. ト書き連鎖構文と関連構文：ト書き連鎖を内に含む構文

ところが、特定の文脈では主題をとることが可能である。(19) のような例である。(19) は、場面説明するアナウンサーに典型的に見られるもので、これを「状況主題構文」と呼べば、(20) のような形で当該のト書き連鎖を内部に包摂する関係になっている。「状況主題構文」は、主題部を「状況指示」の働きをしていると考えられる指示語が占めているもので、「NP<sub>1</sub>ハNP<sub>2</sub>ダ」の形式の名詞述語構文の特殊な事例と考えられる。Goldberg (1995) や Lakoff (1987) の言う継承関係や「～に基づく」(baed on) 関係にあると考えられる。ト書き連鎖は他の構文を含めたネットワークをなしていると考えられるが、この点はここでこれ以上触れない (cf. 議論の詳細は、坪本 (2001) 参照)。

- (19) こちらは、[快調に走る高橋選手] です。(cf. 快調に走る高橋選手。)
- (20) A. [指示語]<sub>TOP</sub> [XP NP] ダ。(状況主題 (説明) 構文 > 名詞述語構文  
(=NP<sub>1</sub>ハNP<sub>2</sub>ダ))
- B.  $\phi$  [XP NP]. (ト書き連鎖)

次に、(20A) の「状況指示語」と(20B) のゼロ形式との関係が問題になるが、その

前に、英語の場合として、ト書き連鎖を含む構文として(21)のような例があることを指摘しておこう。

(21) There is Dereck, running around the track.

英語のト書き連鎖は、(22)の(a), (b)のような2つの節からなる二重節構文 (bi-clausal constructions) の下線部分に相当している (Lakoff (1987), Lambrecht (1978, 1994))。二重節構文は、(23)の二つの働きを合わせ持ったものとされるが、ト書き連鎖も同様の働きを持っている。後で見るように、日本語の場合にも二重節構文として位置づけられるが、それは、日本語の特質を反映したものである (第5節参照)。

(22) There is Dereck, running around the track. [bi-clausal construction]

a. Dereck is there.

b. Dereck is running around the track.

(23) a. NP に注目する。((再) 提示：焦点、話題)

b. NP と XP はひとつの叙述を形成し、全体で出来事、状況を表す。

ト書き連鎖を内に含む状況主題の構文では、ト書き連鎖と同じくモノとコトの二重性がある。指示機能と修飾機能の関係を示したのが(24)-(25)である (その他の用法の詳細は、坪本 (1992, 2001a, bなど) 参照)。「こちら」が「空間・場面指示」なのか、それとも「個体指示」なのかに対応して、前者の場合には「主語+述語」を基本形とした<述体>の形式が可能である。その意味で、日本語の(19)のような場合も、英語例(18)と同じように、《NP (高橋選手) を同定あるいは提示すると同時に、それが中心的に関与する事態をも表す》という意味で「二重節構文」として位置づけられる。((25b)の#は、意図した意味において不自然であることを示す。)

(24) a. こちらは、[快調に走る高橋選手] です。[空間・場面指示]

b. こちらは、高橋選手が快調に走っています。(アナウンサー調)

(25) a. こちらは、[シドニーオリンピックで優勝したことがある] 高橋選手です。

[個体指示]

b. \*こちらは、高橋選手がシドニーオリンピックで優勝したことがあります。

(26), (27) を比べると、「こちら」を用いた場合、ト書き連鎖が表す事態が生じている場所と話し手が発話を生み出す時の話し手のいる場所とが同じでなくてはならない。(26)の「こちら」は、ト書き連鎖で背景化されていた場所が図化された関係にあり、英語例(28)のペアに見られるような場所の関係を想起させるところがある (cf. Langacker 1990)。

(26) こちらは [\_\_\_\_\_ 快調に走る] 瀬古選手です。(背景の<場所>の図化)

(27) [こちらは] [(*\**そちらで) 快調に走る瀬古選手] です。

(28) a. The garden is swarming with bees.

b. Bees are swarming in the garden.

#### 4. モノとコトの<両義性>をどのように説明するか

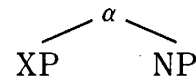
##### 4.1. 知覚の<多義性>と<図>(Figure)と<地>(Ground)の反転現象

(29)のように、英語の知覚構文の当該の連鎖はモノとコトの多義性を持つ(だいたい、次の3つの構造が提案されている。cf. 知覚構文:(i)小節(SC)、(ii)疑似修飾(後位修飾)、(iii)(叙述的)付加詞)。ここでは、モノとコトの両義性を図と地の反転図形に見られるゲシュタルト現象として捉える (cf. Tsubomoto (2000), 坪本 (2001) 参照)。つまり、(30)のように、モノとして解釈される場合とはNPが図になっている場合であり、コトとしての解釈はXPが図になっている場合と考える。問題は、 $\alpha$ の二面性をどのように図と地の反転図形として説明するかということである。そのためには、図と地の関係をより動的に捉える必要がある。

(29) I saw [John riding his bike], and you saw it/him too.

(30) [ $\alpha$  XP NP] 日本語ト書き連鎖

a. NP(図)  $\rightarrow$   $\alpha$ =NP b. XP(図)  $\rightarrow$   $\alpha$ =XP



図地分化は、コンテキストに依存しており、これは、ウサギアヒルといわれる(33)の絵が(34)の二つのコンテキストに対応して、優位な解釈としてウサギになったり、アヒルになったりすることと比較される。もちろん、我々はウサギとアヒルを同時に見ることはできない。が、(33)の絵そのものには、アヒルとウサギが共存している。見



る時に一時に決まる解釈に相当するのは、ここでは、問題の連鎖が用いられるコンテキストである。多義的な連鎖は、(31), (32) のように埋め込まれた文内コンテキストによってモノ、コトいずれの解釈にもなりえるのであるが、ト書き連鎖は単独ではいずれとも決められない。所与の場面や文脈次第で、NP 中心とも XP 中心とも解釈されることになる。

(31) [Your teachers quarreling with each other last night] has/have been observed by some of the students. [Declerck (1981)]

(32) a. A man unhappy is seldom in control of his emotions. [Bolinger (1965)]

b. A man unhappy is just the sort of situation that I don't like.

(33)



(34) ウサギアヒル [cf. ハンソン (1986)]



#### 4. 2. モノとコトの〈共生〉

それでは、ト書き連鎖がどのようにしてのモノとコトの〈両義性〉を持ちえるのかを考えてみることにする。考察の端緒として、ト書き連鎖に感ぜられる「動き」とはどのようなことを考える。ひとつは修飾機能の面から、もうひとつは先行文脈との関係から考えてみよう。まず、修飾機能の側面である。(35) の2つの下線部を比較すると(35b)の場合は、(35a)のように、例えば、「しずかな雨」や「優しい雨」と比較しているのではなく、同じ雨のひとつの局面を述べているのであり、一時的な状態を表している。(35a)の修飾要素が静的 (static) であるのに対して、(35b)の「激しかった」には、「おさまった」との間に状態変化という「動き」がある。このような場合、状態の変化を明示的に表した構文(36)と(35b)とが相関性を持ちえるところに見て取ることができる(同義と言うことではない)。つまり、一時的状態にある(35b)の修飾部は、(36)の叙述性に対応しているということである。このことは、英語例(37)

にあって、一般に恒常的な性質を表す場合に比べて、一時的な (temporary) な状態を表す場合には、(37b) のような限定的な用法ではなく、(37a) のような叙述的な用法が用いられると言われることとに対応する (cf. Bolinger (1967))。 (35b) と (36) の関係については、興味ある問題であるが、ここではこれ以上触れないことにする。

- (35) a. 激しい雨がふりました。(cf. 静かな雨、優しい雨)  
 b. 激しかった雨がおさまった。 [cf. 寺村 (1984)]
- (36) 雨が激しかったのがおさまった。(cf. 主要部内在型関係節; 坪本 (2001))
- (37) a. This whisky is straight. (一時的性質)  
 b. This is straight whisky. (恒常的性質、ウイスキーのタイプ)

次に、文脈との関係から XP の「動き」を考えてみよう。例えば、(38) の問題の連鎖にあっては、XP 部は先行文脈の動きに対応した「動き」を表している。

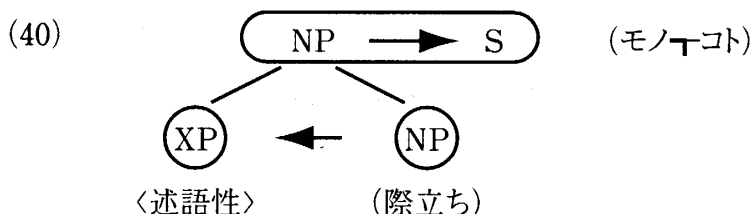
- (38) 黒井、革のカバンから原稿の束を取り出し、螢子に差し出す。受け取る螢子。  
 (山田洋次『学校』) cf. (42)

次に、(39) のようなコンテキストを考える。まず、当該の連鎖 (急流を必死で漕ぐ隊員たち) は、先行文との関係では XP 中心として「漕ぎ出す」→「急流を必死で漕ぐ」という事態の動きを表し、さらに後続要素「近づく」の主語なり主題なりとして働くという関係からは NP 中心として特徴付けられる。これは、 $\alpha$  (=XP-NP) の多義性 (図地反転) がコンテキストに依存していることを端的に表している (cf. (33), (34) 参照)。

- (39) 水かさの増したタケマ河、アルセーニエフ一行六人が筏を作って  
漕ぎ出す。急流を必死で漕ぐ隊員たち、やっと岸に近づく。
- 
- $\alpha$ =XP中心                       $\alpha$ =NP中心

以上のことから、XP がモノの状態の一局面を表す場合、XP は <主語 (NP) + 述部 (XP)> の XP に通じる述語性を持つと考えてみよう。このような特徴づけは、日本語ト書き連鎖が状況や事態 (コト) として捉えられる場合の NP に対する XP の修

飾機能は、英語の存在や知覚を表す (31), (32) のような構文の当該の連鎖に見られる後位修飾あるいは疑似修飾の用法と共通した面を持っていることを示している。



このような状況を図示したのが (40) であり、ト書き連鎖は、NP を中心とした名詞句 (すなわち、(30) の  $\alpha = \text{NP}$ ) で XP の「際立ち」によって <述語性> を持ち、NP 全体が文相当の意味として状況や事態として解釈されることになるわけである。文としての側面は主語を図とした主語中心の構文から述語中心の構文として捉えられるものであり、「文末主語文」としての側面を持っていることになる。これを別の言い方をすると、(40) が表す図地転換は (41) のような関係になる。すなわち、「主語+述語」の形式が主語を統語的な図とした場合とすると、ト書き連鎖 (XP-NP) は主語中心ではないと言う意味で、脱中心化した形式として捉えられるということである (結果として、述部中心に再中心化される)。統語的図地分化に関しては、Langacker (1991) 参照。

(41) 主語 (S) + 述語 (V)  $\longrightarrow$  [  $\alpha$  XP NP ] (=VS) (文末主語文)  
 主語 (=図) 中心  $\alpha = \text{XP}$  : 述語 (部) 中心

(41) のような意味での脱中心化した構造は日本語にも英語にもあるわけであるが、英語の場合には、何らかの形で主語の位置を要素が占めなくてはならない。このような違いは、英語と日本語との間にある主体を客体に対して相対的に優位と見る立場に対する違いが反映したものとと言える。主体の優位性は、英語にあっては主語志向の形であられるからである。

このように考えると、述部中心の構造が単独で用いられる傾向が日本語ではより強いことが予想される。これは、第5節で、自発的な (spontaneous) な構文を論じる時に立ち戻る。

したがって、日本語ト書き連鎖が、英語例 (42) のような提示機能を持つことはきわめて自然である。なお、XP が図化されることと、NP が焦点化されることが両立

し矛盾しない点については、Langacker (1987) 参照。

(42) Standing and sitting around the pool are Mr. and Mrs. Braddock and their friends.

BRADDOCK: Ladies and gentlemen, your attention please, ... [The Graduate]

以上の議論は、分布を旨とする外的シンタクス (external syntax) では、XP-NP の範疇  $\alpha$  は NP だとしても、意味が反映した内的シンタクス (internal syntax) の構造は、通常の連体修飾構造なり関係節構造とは違ったものが想定される (internal syntax と external syntax を構文文法の観点から論じたものとして Lambrecht (1988, 1994) 参照)。通常の連体修飾構造を (43a) のように表示するとすれば、ト書き連鎖の構造は (43b) のように図式化される関係にあると考える。(43b) の図式化は、通常の関係節 (連体修飾節) と違って、XP が NP に全面的に依存したり、埋め込まれているのではなく、XP と NP は相互に依存しながら、全体で一つの事態を表すことを意図したものである。その結果、①NP と XP の対称性 (「閉まるドア」と「ドア、閉まる」)、②モノとコトの解釈に対応して、NP と XP が相互に包み包まれる関係になる。(cf. Lakoff [1987] の「形の空間化の仮説」から言えば、NP を主要部とした複合名詞句は、(43a) のようになる。つまり、(一般的に) カテゴリーは<容器>のスキーマに基づいて理解され、階層構造は<部分/全体>のスキーマおよび<上/下>のスキーマに基づいて理解される。(43b) は、さらに<連結>による関係関わってくる。連結については第5節参照。)

(43) a. 

XP	NP
----	----

 連体修飾構造      b. 

XP	NP
----	----

 (ト書き連鎖)

さらに、ト書き連鎖の意味が反映した内的構造である (43b) の図式は、(44) の二つの構造を合わせ持っていると考えられる。(44) は判断に基づいた文の類型をあらわしたものであるが、それぞれ、<統合>と<分化>の傾向を示すものと考えられる (44a) は認知的単位 (cognitive unit) であり、(43a) の名詞句もひとつの単位と見なせば、(43a) と (44a) には共通するところがある。(43b) のト書き連鎖の図式は、(44a) の<統合体>としての側面と、(44b) の主題と述部に見られるような<分化>した側面を合わせたものと言うことである。ト書き連鎖の基本的な範疇を NP としていることは、ひとつ

の統合体とみなしているわけであるが、ト書き連鎖には分化する性質が内在しているということである。

- (44) a. 雪 白 い  
(Thetic S)
- b. 雪 i は X i 白 い [cf. 柴谷 (1990)]  
(Categorical S)

このあたりの関係については、5節で取り上げる。

## 5. ト書き連鎖の用法 (II)

5.1. 西村 (2000) では知覚主体の表現可能性について違いを示す (45) のような例によって「主体化」あるいは「主観化」(subjectification) の現象が説明されている。ラネカー流に言えば、言語表現の記述する状況に話して関与する時、言語表現の中に話し手が明示的に存在しているほどその表現は客観的であり、その逆に話し手の存在が明示されないほど主観的である、と考える (cf. Langacker (1990))。したがって、(45) にあって、主語 (知覚主体) が用いられていない日本語例 (45b) の方が主観的であり、事態がより主観的に捉えられているということになる。

(45) a. I (can) see a bus over there.

b. 向こうにバスが見える。

ト書きの中で (46) のような連鎖が用いられることがあるが、 $\alpha$  は主節部が省略されたある種の「はだか形」連鎖に相当するが、このような連鎖が単独で用いられるのは、シナリオなどに限られる。(47) では (a), (b) に対して、(c) のようには用いられないし、(48) では (9) で可能だったのが不可能になる。

(46) a. In the b.g. we see [ $\alpha$  Susan playing the piano]. [b.g. = background]

b. There is [ $\alpha$  Lisa facing him]. [Casablanca] ( $\alpha$  だけの連鎖より説明的)

(47) Saeko opened the door. (a) A middle-aged woman was standing there. (b) A middle-aged woman is standing there. (c)?? A middle-aged woman standing there. ((a) the narrator's, (b) Saeko's) cf. Saeko opens the door. A middle-aged

woman standing there.

(48) Ben asleep in bed and Elaine enters/\*entered softly. [cf. (9)]

5. 2. それに対して、日本語の XP-NP 連鎖は、これまで見たように、英語よりも広く用いられる。例えば、(49), (50) のような場合に、それぞれ、先行文の時制形式が「指さした」や「振り向いた」になっても、当該連鎖をそのまま用いることができる。

(49) その妻が不意に立ちどまり、夫にすがって海の方を指さす。

二人の見た目で——波の打ち寄せる岩場にひっかかっている若い女の死体。(50) 暗がり——不意に明かりが付き、とも子、ビクッと振りむく。立っている正晃。

5. 3. 次に、ト書き連鎖が意識主体の導入や切り替えの働きがあることを見てみよう。

(51) ある日、アダムが仕事を終えて帰宅すると、そこには既に“もう1人の自分”がいて、家族と共に彼の誕生日を祝っていた。(a) 呆然と立ちすくむアダム。  
 (b) 誰が、何のために・・・そして、なぜ自分が選ばれたのか？ (c) 突然、自分の身に襲い掛かった事件の秘密を探るため、家を離れようとするアダム。  
 しかし、家族が、友人が、次々と事件に巻き込まれ、アダム自身も命を狙われる。(ビデオ解説文)

(51) は、ト書き連鎖と「自分」の用法が関わっている場合である。(b) の「自分」はいわゆる、logophoric の用法として、ここでは意識主体のアダムと同一指示となっている場合で、アダム自身の内声であるが、まず、ト書き連鎖(a)によってアダムに注目させ(これは、いわゆる、クローズアップに相当すると言えるが、ト書きの「提示機能」の反映と考えられる)、(b) に後続して、(c) では再びト書き連鎖が用いられているが、語り手がアダムの視点から捉えたもので、「自分」はアダムを指示している。(「自分」に関する詳細な論考として廣瀬(1997)を始め、本シンポジウムを参照(廣瀬(2001))。 (a) で「アダムは呆然と立ちすくむ」とすれば、事実を述べているだけであるが、ト書き連鎖を用いることによって、「“もう1人の自分”がいて、家族が彼の誕生日を祝っていたのを見て」、「呆然と立ちすくむ」という事態の流れの中で(b)

のアダムの内声へとつながっていく。今度は、アダムの内声から、再び、語り手がアダムの視点から捉えた語りの世界に戻る。ここでも、「アダムは突然、自分の身に襲い掛かった事件の秘密をさぐるため、家を離れようとする」になると、不自然なつながりになる。ト書き連鎖によって、意識主体が主人公そのものから語り手を介在した主人公へと切り替えられているわけである。

#### 5.4. 自発的、非意図的な表現の典型として、(52)のような独立名詞構文である。

(52) あ！（白い）馬！（>「馬が白い!」、「馬は白い」）

「あ!」（英語では *there!*）は、最も原初的な経験を表出したもので、主観と客観が未分化の状態ということが出来る。Lyons (1977) は、*there!* を原初的な直示語と呼んでいる。(52)で「あ!」に後続する連鎖は、「あ!」による表出の直接の引き金となったものを言語化した、いわば、知覚の原初的な連鎖と考えられる。つまり、何かを見た時に一定の仕方で限定づけを行う知覚に対応する直接的な言語表現は、述語による限定ではなく修飾語によるということである。ホーレンシュタイン (1984) は、《思いがけず馬を見たものは、彼の知覚を定式化する場合、「ここに馬がいる。この馬は白い。」といったように述語を用いなくて、問題の名詞に修飾語を付与することによって「白い馬!」と言う》と述べている。このような意味で、「主語+述語」の述体の形式よりも独立名詞構文の方がより原初的な表現であるということができる。修飾語を含む独立名詞構文は、言語発達的に見ると、事象を「主語+述語」という形に展開した文に対して未展開な文としての前述語的表現形式として特徴づけられ、言語発達は未展開文から展開文としての述語的表現形式の方向である (cf. ホーレンシュタイン (1984))。

次に、(53)-(55)を見てみよう。(b)については「閉まるドア」に対して「ドア、閉まる」の場合と関連づけることを意図していたが、XP-NP連鎖に議論を限定しているので、ここでは、省略する。それでは、(a)の場合を見て下さい。

(53) a. (駅で電車が出るのを見て) 出る (よ)、電車。

b. 電車 (?が)、出る (よ)。

(54) a. (赤ん坊が初めて歩くのを思わず見て) 歩いてる、歩いてる (よ)、太郎。

b. 太郎 (?が)、歩いてる、歩いてる (よ)。

(55) a. 突っ張る、突っ張る、貴乃花。

b. 貴乃花 (??ガ)、突っ張る、突っ張る。[[が]：対比的]

ここでの眼目は、通常の名詞句の用法と違って、日本語ト書き連鎖がコトとして解釈される場合の述部中心の構造を自発的な (spontaneous) 発話に見られる倒置構文と関連づけることによって、動機付けを行うことである。(40)でも述べたように、脱中心化した構造は日本語にも英語にもあるわけであるが、英語の場合には、何らかの形で主語の位置を要素が占められるのが普通である。それを主体を客体に対して相対的に優位と見る立場の違いが反映したものとしたが、ここでは、それが《状況参加》すなわち、状況の中に主体が身をおき、一体化することである。ここでは、《状況参加》の観点から述部中心の構造を考えてみることにする。

自発的な発話は、(53)-(55)の(a)のように述部を主語に先行させる場合のほかに、場合によっては、述部だけで発話されることも多い(特に、身体感覚に関わる表現では、足を机の角でぶつけた場合、「痛い!」であって、「ひざが痛い」でもないし、「痛い、ひざ」も不自然に響く。(45)の知覚主体が省略される例も非意図的な自発態である、という共通性を持つ)。XPに後続するNPは、XPに対して意味的には主語の役割を果たすが、NPには提示や同定の働きがあると考えられる。(53)-(55)のように、三人称主語の場合でも、例えば、思わず力が入るとか、気持ちが前に動くなど自分自身が直接関わっているような運動感覚が伴うことも考えられる。そういう意味で、言語主体は、運動感覚的にその状況に参加していると言うことができる。スポーツ放送のような状況ではアナウンサーが聞き手を意識していないということは普通ないが、状況次第で、我を忘れて絶叫するアナウンサーをしばしば目に、あるいは耳にすることがある。こういう場合を含め、自発的な発話、すなわち、非意図的な発話というのは、聞き手あるいは聞き手の存在を忘れて、意識しないで発話されたものであり、その意味で、述部中心の自発的な発話における話し手は、廣瀬(1997、2001)の言う「私的自己」と密接に関わっていると考えられる。

5. 5. (53)-(55)で見たように、ト書き連鎖の根底には、自発的な発話の連鎖として述部中心の倒置形式があるとした。その形式はかなり流動的で<未定形>な性質を持っている(例えば、助詞の使用やNPの有無)。ト書き連鎖(XP-NP)は、このような未定形な連鎖が構造的に固定化された側面を持っていると考えられる。固定化された構造は、NPとしての側面と文末主語文としての側面を共生させることになる。



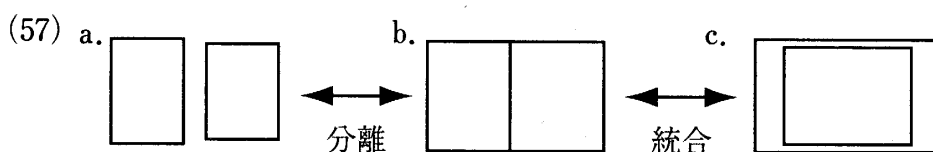
ト書き連鎖を自発的発話に見られる、不安定な構造と関連づけ、それが固定化されたのがト書き連鎖であるとする現象は、英語では、(56)の関係と比較することができる (cf. Bolinger (1977))

(56) a. It's nice, sitting around and talking. (後から思い付いた特定化)

b. It's nice sitting around and talking.

(文法的に定められ、構造として固定化している)

このことは、(43b)のト書き連鎖の認知スキーマがその根底において、〈分離〉と〈統合〉の2つの方向性を持つことを別の角度から動機づけるものである (cf. (43b) [= (57b)] のスキーマが〈分離〉と〈統合〉の2つの側面を持つことについては、坪本 (1995) 参照)。



(a) → (b) の関係は〈分離〉、(b) → (c) の関係は〈統合〉の方向性である。〈分離〉の関係では、(i) それぞれが独立性を持ち並列したつ XP, NP が全体でまとまりを形成している場合と、(ii) 文末に主語、あるいは主題を持つ右方転位文 (**Right dislocation**) に対応するような場合がある。また、〈統合〉の方向に対応するのは、通常の連体修飾構造 (関係節) としての側面である。例えば、こうしたト書き連鎖の持つ〈未定形性〉は、アクセントの面にあらわれる。

ト書き連鎖が通常の連体修飾構造と違って、分離性を示す一つとして、(16b, d) に示したようなアクセントパタンの可能性がある。(58) は、通常の連体修飾と比較したもので、ゲシュタルトとしての性質を持つト書き連鎖の持つ多面性を示すとともに、XP-NP 連鎖が (117) のような述体の文形式 (SV) と対称的な関係にある、文末主語文 (VS) として特徴づけられる側面を示している。とりわけ、XP の叙述性の存在が明示的に反映した場合である。

(58) a. Simaru doa [連体修飾節 (関係節)]

- b. Simaru doa. [ト書き連鎖] 大阪アクセント
- c. Simaru doa. [関係節]
- d. Simaru doa [ト書き連鎖] 東京アクセント

(58)には、大阪アクセントの場合と東京アクセントの場合がそれぞれ上げられているが、ト書き連鎖は、関係節とは異なるアクセントパターンを示しえることを表している。さらに、XP-NP連鎖が語順が転倒した、ある種の文末主語文と対応する性質を持っていることを予想させるのは、(58b)の〈ト書き連鎖〉が(59)のように通常の〈主語+述語〉の述体形式の語順の場合と対称的な鏡像パターンをしていることである。さらに、ここで意図しているのは、(58b)のパターンは、右方転位文(RD)のそれと同じアクセントパターンであり、ここでのアクセントパターンは〈右方転位文〉のそれに対応している、ということである。

(59) Doa(ga)simaru. "The door closes." (cf. (110b): 大阪アクセント)

(60) Simaru(yo), Doa(ga). (右方転位文)

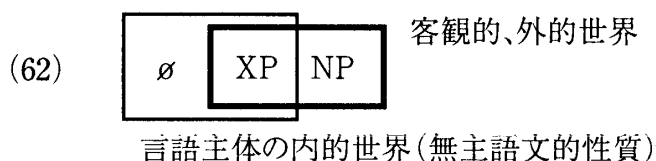
ところで、ここでト書き連鎖と呼ぶ構文は、通常の連体修飾構造であり、(58)で区別したアクセントパターンの違いはないという意見がある。ところが困ったことに、この意見は、全体の議論(批判の対象にしているのは、坪本(1999)である)の意図がまったく理解されていないで、(58)のアクセントパターンのところだけを取り出し、こういう違いはない、と決めつけているのである。(ちなみに、わたしは関西人で、このアクセントパターンについては、方言学者の山口幸洋氏の協力を得ている)。それはともかく、もっともこの種の批判で困るのは、どういう意図で(58)のパターンがあげられているのか、全体の構文的視点がまったく欠如しているところなのである。

5. 6. 日本語が《状況参加型》の性質を英語よりも強く持ち、運動感覚的、共感的な意味として自発的な発話の中に内在しているという形で見ただのであるが、例えば、次のような例にあっても、言語主体は、状況の中に身を置きながら、その状況の変化に伴った「動き」を経験している、という側面があるように感じられる。

- (61) a. まずバロンのピアノのイントロで、しめた、と思う。・・・柔らかいフルートだ。クラシックからジャズに入った。そして全編を泳ぎまわるベースのサンティ・デブリアーノ。この「動く」ベースはまったく聴きもの。  
(共に「動く」感覚)
- b. 演奏が始まった。・・・私は一心にビル・スチュワートを見、そして聴いていた。時々お尻を浮かして馬力をつけるビル・スチュワート。ああ、いいなあ。  
(寺島靖国『Jazzはこの一曲から聴け!』)

以上のように、自発的表現からト書き連鎖の成り立ちを考える時、言語主体の感覚的イメージをはじめとする内的イメージの世界では、言語主体は、状況に密着して状況と共にいっしょに動き、状況の変化に参加している(行為実践的: cf. 木村 2000 (=1994))、という《状況参加型》の傾向が日本語の文法体系の中に反映していると考えられる。

(62)は、その成り立ちにおいて、ト書き連鎖が内的世界と外的世界にまたがった「二重節構造」をしていることを意図したものである。



運動感覚を伴った言語主体の内的世界を言語的に担う中心要素はXPであり、そういう言語主体の内的世界の中に本来客体としてのNPを取り込むことによって、NPとXPはひとつの状況や出来事としての〈場〉を形成している、とすることである。その逆に、言語主体の内的世界の中で主観的に捉えられていた事態の中から、NPを客体として取り出した、とも考えられる。このように考えると、(63)-(65)のようにNPが言語主体であると、ナルシスト的な意味合いが生じやすくなる。

- (63) スッキリしても、においが消えるまでこもっていた私です。(ウオシユレットコピー)
- (64) 私はスッキリしても、においが消えるまでこもっていた。
- (65) ・・・古いCMで“モーレッツからビューティフルへ”というのがあったが、私自身の内部で、今その方向にベクトルが動いているを感じる。否定から肯定へ、内なる戦いが始まろうとしているエナジーを感じている四十三歳の

私である。(朝日新聞)

(63)は、トイレについてはいろいろあったけれど(この部分は省略されているが背後に感じられる)、今はそういう状況から脱しました、今の私はスッキリして気持ちがいいという含みを持つ用法である。(63)を(64)のようにすると、私はこれまでどうであったのかを述べているだけで、(63)で感じられるようなトイレに関わる、これまでの状況を説明することによって今の自分に満足しているという気持ちを際立たせるといった、意味合いは出てこなくなる。

(63)-(65)のような場合、NPが言語主体自身であるが、意識主体として意識されないでもっぱら感覚を中心とした言語主体の内的世界と外的(客観的)世界の存在としての自己とが共生していることになる。その結果、どこかナルシスト的用法として特徴付けられるわけである。

## 6. 結語

以上を要するに、次の4点にまとめられる。

(a)ト書き連鎖は「モノ」と「コト」が共生した構文である。(b)ト書き連鎖のXP部(「中心」)の根底には、自発的な(spontaneous)表現に見られる述部中心の表現(すなわち、倒置形式)があり、それは言語主体の内的(運動感覚的)世界を反映している。(c)ト書き連鎖は、こうした内的世界とNPを中心とした外的(客観)世界がひとつになっている場を形成する。(d)運動感覚的とは、《状況に密着して状況とともにいっしょに動き、状況の変化に参加する》という意味で、状況(NPを含む)と一体化した身体的経験と結びついている(その典型は、主観的表現としての<無主語文>に見られる)。(e)日本語でト書き連鎖が英語よりも広く用いられる要因のひとつは、(b)-(d)の傾向の違いにある。これは、日英語間の主語中心の傾向の違いに対応している、と思われる。

\*本論は、第19回日本英語学会大会(2001. 11. 11.(於)東京大学駒場)におけるシンポジウム「新たな日英語比較に向けて」での発表草稿である(坪本(2001)では、より包括的に論じた)。実質的には、参考文献であげてある拙論を総合したものであり、内容的に既発表したものと重複している。なお、発表者は、私(司会兼講師)の他に、

廣瀬幸生氏（筑波大学）、和田尚明氏（茨城大学）であった。二人からはいろいろな刺激を受けた。ここに記して、感謝の意を表する。

## 参考文献

- Bolinger, D. 1967. "Adjectives in English: attribution and predication," *Lingua* 18.  
 \_\_\_\_\_. 1977. *Meaning and Form*. Longman.
- Declerck, R. 1982. "The triple origin of participial perception verb complement," *LA* 10.
- Goldberg, A. 1995. *Constructions*. Chicago, The Univ. of Chicago Press.
- ハンソン、N. R. 1986 (1958). 『科学的発見のパタン』（村上陽一郎（訳））講談社学術文庫.
- 池上嘉彦. 2000. 『日本語論への招待』講談社.
- 廣瀬幸生. 1998. 「人を表すことばと照応」中右実（編）『日英語比較選書第4巻：指示と照応と否定』. 研究社出版.
- \_\_\_\_\_. 2001. 「話し手概念の解体から見た日英語比較」日本英語学会第19回大会シンポジウム.
- ホーレンシュタイン、エルマー. 1984. 『認知と言語』村田純一他（訳）. 産業図書.
- 木村敏. 2000. 『偶然性の精神病理』岩波現代文庫.
- Kuroda, S-Y. 1974-77. "Pivot-independent relative clauses in Japanese," I-III. *Papers in Japanese Linguistics*..
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Univ. of Chicago Press.
- Lambrecht, K. 1988. "There was a farmer had a dog: syntactic amalgam revisited." *BLS* 14.  
 \_\_\_\_\_. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge Univ. Press.
- Langacker, R. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. vol. 1. Stanford University Press.  
 \_\_\_\_\_. 1990a. Subjectification. *Cognitive Grammar* 1.
- Lyons, J. 1977. *Semantics* vol. 2. Cambridge University Press.  
 \_\_\_\_\_. 1982. Deixis and subjectivity: Loquor, ergo sum? R. J. Jarvella and W. Klein (eds.). *Speech, Place and Action*. John Wiley.
- 西村義樹. 2000. 「対照研究への認知言語学的アプローチ」『認知言語学の発展』坂原茂（編）ひつじ書房.

- 尾上圭介. 1977. 「語列の意味と文の意味」『国語学と国語史』 明治書院
- 柴谷方良. 1990. 「助詞の意味と機能について—「は」と「が」を中心に—」『文法と意味の間』 くろしお出版. 281-301.
- 坪本篤朗. 1991. 「現象（描写）文と提示文」『文化言語学』（石綿敏雄他（編）三省堂. \_\_\_\_\_ . 1992. 「関係節と疑似修飾—状況と知覚—」『日本語学』（2月号）明治書院. \_\_\_\_\_ . 1995a. 「場面の認知論—ト書き連鎖の日英語比較」『英語青年』（3月号）研究社. \_\_\_\_\_ . 1996. 「日英語 amalgam 構文の形と意味と語用論—状況と知覚の連鎖—」第14回日本英語学会ワークショップ（於 関西学院大学） \_\_\_\_\_ . 1998a. 「日本語 amalgam 構文の形と意味と語用論」『人文論集』静岡大学人文学部. 109-129 \_\_\_\_\_ . 1998b. 「文連結の形と意味と語用論」中右実（編）『日英語比較選書第3巻：モダリティと発話行為』研究社出版. \_\_\_\_\_ . 2001a. 「モノとコトから見た文法」筑波大学学位論文 \_\_\_\_\_ . 2001b. 「"It is X" と「それは X だ」：「二重節構文」の形式と意味」『英語青年』（8月号）.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味』 くろしお出版.
- 和田尚明. 2001. 「時制現象から見た日英語比較」第19回日本英語学会シンポジウム発表ハンドアウト.